

「これからの公民館 ～新しい時代への挑戦」

小林文人 編

(株)国土社 発行

1999年12月5日

II 公民館実践の新しい胎動 より

二 和紙の里づくりから見えてきた、公民館の可能性

～飯田市・公民館の取り組み

(一) 下久堅公民館の事業

あがったあがった連だこ

飯田市立下久堅しもひまきだ小学校の子どもたちの手で、二〇〇枚の連だこが一斉にあげられた。当日はあいにくの無風状態で、当初予定していた二〇〇枚を一つの糸にまとめて上げる試みはやむなく断念したが、学年ごとに分けられたたこは、精一杯の力走で何とか全部大空に舞い上がった。

たこをひく教師らが全力で走り回る後から、歓声を上げて子どもが追う。少しでもたこが上向くと「あがったあがった」とみんな大喜び。半分ぬかるんだ田んぼの中を泥だらけになりながら教師も子どもも夢中で走り回る。

これらのたこは小学校の子どもたちが自分たちの手で漉いた和紙を材料にした手作りである。「村の先人たちが残した和紙に、未来を担う子どもたちが夢や希望をのせて、大空に飛ばそうとし

ている」と、宮内道明下久堅公民館長はいう。一九九九年三月十日に行われたこの行事は、下久堅公民館の「和紙の里づくり事業」三年目のまとめの取り組みであった。

長野県の南、南アルプスと中央アルプスに抱かれ、諏訪湖を源に遠州に流れる天竜川に貫かれた飯田市は、人口約十万七〇〇〇人の山の都である。

下久堅は、天竜川の東側に位置し、人口約三五〇〇人、世帯数約九〇〇戸、高齢化率は二六・七％、過疎化とともに高齢化少子化の進む地域である。公共交通機関も路線バスが日に数本、地域に唯一あった医院も医師の高齢により廃業し、地域商業も車などによる生活圏の拡大で零細となって今の一代限りが多いなど、地域の将来を考える上でマイナスの材料は多い。

下久堅はかつて夏場は養蚕、冬場は和紙づくりが主要産業であったが、現在では稲作、梅、柿を中心とした農業地域である。この地域には、農を基盤にした地域づくりをすすめるというグループがいくつもあり、都市交流などを通じ活発に活動している。下久堅に限らず飯田市には地域づくりに積極的に取り組むグループが多くあるが、そういうグループは、地域的に見るとさまざまな困難を抱えた地域に多い。そこでは困難を危機感と捉え、逆に力としているといえる。

公立民営―飯田市民館の運営体制

飯田市は過去四〇年の間に一三の町村との合併を繰り返してきたが、合併後もそれら旧町村単位

に市役所支所と共に公民館が設置され、この支所・公民館が地域住民のさまざまな活動の起点として機能している。公民館は市街地部分も含めて概ね小学校単位に一九置かれ、非常勤の館長と常勤の主事一〜二人などが勤務している。またそれぞれの地域には住民によって組織運営される併せて九七の分館が、地域住民の日常生活の基礎的単位に置かれている。

「地域中心」「並立配置」「住民参加」「機関自立」。飯田市の公民館はこういう四つの原則に基づき運営されている。この中の「住民参加の原則」を具体化し、公立民営とも称される飯田市民館の運営方法の基本となるのが「文化」「広報」「体育」という三つの専門委員会制度である。それぞれの委員会における活動は、例えば広報委員会は公民館報の発行（年五〜二回）や地域の記録活動を、体育委員会は運動会や各種スポーツ大会・研修会を、文化委員会は文化祭や芸能祭を、というように公民館事業の多くは住民の中から選ばれたこの専門委員会が主体となって企画運営されている。また運営審議会も公民館ごとに設置されている。

こういう住民主体で公民館を運営していく仕組みによって、飯田市の公民館は地域の中でなじみの深い、存在感のある機関として捉えられとともに、公民館活動の経験が地域づくりに生きたり、地域づくりの中核となる人材によって公民館活動の内容が深められるというような結びつきを持ってきた。

一九七三年から取り組まれた「市民セミナー」は、地域課題の解決をめざす学習運動であり、その運動を通して多くの住民や職員が育っていった。一九七九年に始まる「人形劇カーニバル」は、

リニユール第一回となる一九九六年三月に行われた文化祭は、当時、まだ流行前だったペットボトルロケットの製作や競技会を取り入れたり、インターネット体験コーナーなど、これまでにならぬ新しい内容が盛りだくさんで、大成功のうちに終了した。これまでの文化祭では、企画から関わるのは文化委員だけであったが、この文化祭からは、それぞれのグループや団体が準備から片づけまで主体的に関わったのも成功の要因であった。

一つの行事を見直すことは、大変労力を費やす作業である。特に文化祭のように恒例の行事として定着したものであればなおさらである。文化祭の見直しをきっかけとして、文化委員会は自分たちが主体的に事業をつくりあげていくことのおもしろさや意義を実感し、文化委員会としての次なる取り組みを模索することとなった。

和紙に着目したひさかた村塾

文化祭の変更に先立つ一九九四年、下久堅の古寺「文永寺」をテーマとしたひさかた村塾が行われた。ひさかた村塾は一九七九年に開講した下久堅公民館主催の大学講座である。この講座は専門委員会とは別に、地域住民による実行委員会体制で企画運営されてきたのであるが、さまざまなテーマを単発の講演会方式で取り組むのが従来の形であった。この講座を地域に目を向けて歴史や課題をテーマとし、地域住民を講師として学ぶ形に改めるとともに、一つのテーマで学ぶ通年の講座とした。この年の講座から地域の歴史をテーマに学習を進めるなかで、この地域がかつてとても和

紙づくりが盛んだったこと、そしてその伝統がほとんど消えかけていることがみえてきた。

飯田周辺の和紙づくりの歴史は古く、室町時代から行われていたという説もある。江戸時代から明治時代初期が最盛期であったが、断髪令でまげを結うための元結の需要がなくなったことや洋紙の普及により和紙産業は衰退した。それでも昭和初期には和紙生産額が県内一だった記録もあり、中でも下久堅は、当時、七割の世帯で和紙を漉き、他の世帯もほとんどが和紙関連の仕事に従事し、「全村紙漉き成村」ともいわれていた。今日、飯田市は全国屈指の水引製品の産地であるが、これも和紙産業が盛んであったなごりであり、大相撲力士の元結も飯田で作っている。

しかし、この地方を一九六一年に襲った通称「三六災害」を境に、災害復旧の土木就労需要などでほとんどが廃業してしまった。現在、飯田市と近隣町村全体で和紙が漉けるのは下久堅の一軒のみで、この一軒も家業ではなく、下久堅小学校の卒業証書用に漉く程度である。

(二) 和紙づくりの継承

和紙の里づくりプロジェクト

「このままでは、近い将来このわずかな灯火すら消えてしまう日がくる。今のうちに何とかしなければ」と、かつての村の主要産業である和紙づくりを、継承すべき地域の伝統文化と位置づけて、文化委員会が中心となった取り組みを始めた。紙漉きが盛んであったのはおよそ四〇年前までであり、当時そういう仕事に関わった人たちも今では七〇歳前後のお年寄りになり、和紙づくりの継承

は今が最後のチャンスである。

「とにかくやってみよう」を合言葉に、文化委員会の活動の中心に和紙づくりを据え、任期二年の委員の在任期間をかけて最低限に継承できる技術を学び、退任後も自主的に取り組むことを決めた。紙漉き技術は、付け焼き刃の研修では修得できないが、まず一步、前に踏み出そう、とにかく事を起こし、まねごとでも紙を漉くことが、この事業を進める上での第一段階と考えた。

「人」「原料」「道具」「場所」の四つが、この事業が成立するための鍵である。そしてこの中で、一番のポイントは紙を漉く場所の確保にあった。和紙の歴史を学び製法の話も聞いても机上の域を出ない。現地研修をしても一過性の行事でしかない。息の長い継承活動には、身近な場所ですらも紙が漉けること、そしてその場所や道具を大切にしようという気持ちが必要となる。そこで市などの補助を受けながら、公民館裏のテッドスペースに簡単な小屋を作り、この地域で和紙づくりの場を意味する「紙屋」と名付けた。

一方、地区内などの家も四〇年前には廃業し、かつて多くの家に残っていた紙漉きの「道具」も家の建て替えなどでほとんど処分され、残った物も保存状態の悪い物、修理不能の物が多かった。しかし和紙づくりに思い入れを持ち大切に保存していた地域の人などから無償で提供をうけたり、小学校の郷土資料として保存されていた道具を使用していただくことで、そろえることができた。地域に眠る昔ながらの道具を活用しての和紙づくりの復活となった。

また和紙の「原料」は地区内の梅畑を借用し、文化委員会が中心となって木の伐採など畑の整備

を行い、昔のなごりで自生している楮の苗を土手から採取して植えた。トロアオイも種を埼玉から取り寄せ、小学校一、二年生の授業の一環として栽培に取り組んだ。

下久堅小学校では地域に唯一残っている和紙づくりの家で漉かれた和紙で卒業証書を作っており、また「地域とともに、地域に学べ」という方針に基づき学校運営が行われていた。この計画が立ち上がったのは五月という年度の途中の時期ではあったが、これらの背景から下久堅小学校がこの公民館の事業に全面的に関わってくれることとなった。

「人」は、かつて生業とし紙漉きに従事していたお年寄りたちの協力を得ることができた。そして文化委員と紙漉きの技術を持つお年寄りのあわせて三〇数人によって構成された「和紙の里づくりプロジェクト」が発足した。

このプロジェクトにより、和紙づくりの条件整備（第一段階）、地域への浸透定着と紙漉き技術の継承（第二段階）、自主グループの育成による地域おこし（第三段階）という、十年計画の取り組みが始まった。

このプロジェクトに参画している七〇歳すぎのお年寄りたちは、昔を思い出して生き生きと活動し、このパワーが事業推進の原動力となっている。社会の中でも一線を退いたお年寄りにとって「昔取った杵柄」で活躍の場ができたことが、結果的に生きがいづくりに結びついている。

取り組み二年目となる一九九七年度も、下久堅小学校では一、二年生の生活科の授業として和紙



お年よりの指導で紙漉き体験中

の取り組みに参画することとなった。和紙の原料となる楮やそれをつなげるトロアオイの栽培から収穫にはじまり、実際の和紙づくりの工程にも関わった。

二月には自分たちで栽培して収穫し漉いた和紙を材料とし、六年生も合同して一〇〇枚の連だこづくりに取り組んだ。この連だこは、三月に小学校を会場として開催された、リニューアル二回目の地区文化祭で見事に大空高く舞い上がった。

一九九八年度は地球環境問題に関わり注目されているアフリカ原産のケナフを原料にした紙づくりにも取り組んだ。ケナフは地球温暖化の原因ともなっている二酸化炭素の吸収率のきわめて高い植物であり、環境対策として栽培の取り組みが始まっているが、ケナフがマスコミなどで話題となる以前の、時代に先駆けた取り組みでもあった。

この年の紙漉きには、昨年生活科で関わった三年生も挑戦した。この三年生たちが卒業を迎える時には、自分たちの卒業証書を手作りすることもこの事業の一つの目標である。

また、この年の連だこづくりは、全校生徒が参加することになった。全学年を三日間に分け、お年寄りの指導で二〇〇枚余の和紙を漉くことができた。小学校と共同で進めた和紙学習は、子ども

たちが将来の地域の担い手として和紙そのものを学ぶだけでなく、地域のお年寄りを師とした学びの交流を通し、学校内だけではできない貴重な体験学習として大変意義があった。

飯田市の公民館はおおむね小学校単位に設置され、多くは小学校に隣接している。また飯田市立図書館の分館を併設し、子どもの図書を中心に整備していることから子どもたちにとって大変なじみの深い施設である。また運動会の会場として小学校のグラウンドを借りたり、文化祭に小学校の子どもたちの作品を展示したり、もともと小学校や子どもたちとの関わりがあったことが、今回の取り組みに小学校が積極的に関わってくれる素地となった。公民館が大人たちだけでなく、次代を担う子どもたちにとっての学びや交流の場となることは、これからの時代、特に大事な課題であろう。

一枚の紙の価値を知る和紙講座

小学校の取り組みと同時進行で、一九九七年六月、三〇人の参加者によって和紙講座が始まった。座学として和紙の歴史や商いについて学んだり、原料の栽培から紙漉きまでの一連の和紙づくりの工程を体験する実習、全国手漉き和紙の集いに参加した研修旅行などがその内容である。

和紙は栽培から加工まで四〇あまりの長い工程を費やすことでようやく完成する製品である。

加工の工程を簡単に紹介すると、まず原料となる楮の束を大釜に蓋をして約二時間蒸し、幹から表皮を剥ぐ。その表皮を水につけてふやかし、和紙の原料とするために表面の黒皮をそぎ落とす

(これを「たくり」という)。白い繊維になった楮を煮て柔らかくし、綺麗な水でさらす。数日さらした後、楮の繊維に付着している黒皮のそぎ残しや傷を根気よく取り除く。これは冷たい水仕事で冬場の仕事として厳しいものがある。その後、繊維を板の上にとめ、「ベイ」という木棒でたたいて繊維を叩解する。昔は、これが子どもたちの仕事で、夜、どこの家からも聞こえてきた音だったという。子どもたちにとってこの作業は、手のあかざれから血がにじむほどで大変だったという話をよく耳にする。これを水を張った「すき舟」という和紙を漉くための水槽にとけ込ませ、ここにトロアオイの根からとった汁を加えてつなぎとする。その液を「簀桁」で均一に何回か繰り返して漉き、厚みをつける。そうして漉いた紙を重ね合わせて一晩水切りをしてから圧力をかけて水を絞り、一枚ずつに分けて乾燥させる。裁断して形を整えてようやく製品として完成する。

このような手間ひまかかる冬場の厳しい作業によい思い出を持つ人は少ない。したがって、この事業がスタートした当初、かつてを知る人で興味を抱いて参加してくれる人はほんの一握りであった。このことは当時、和紙づくりが大変な仕事だったことを物語っている。

こういう昔ながらの方法で実習を通して和紙づくりの工程を学ぶことで、参加者は、紙漉き技術を修得すること以上に、「一枚の紙の価値」を学んでいる。一般に紙漉き体験施設では、未経験者でも和紙を簡単に漉くことができる。しかしそれでは、その漉きあげた紙の価値まで理解できない。とかく和紙づくりは「紙漉き」の場面がクローズアップされがちであるが、そこまでの準備段階なくしてはできない。原料栽培から和紙になるまでの過程を大事にした取り組みこそ、公民

館活動としての取り組みの意義がある。

昔の和紙は、白さを追求していた。しかし今日、和紙らしさは「黄ばみ」にあり無漂白に近いものが本物らしいといわれ喜ばれる。かつて産業として成り立つには、採算面を考えて楮にパルプを混ぜたり、薬品で漂白することが多かった。洋紙である今日の新聞紙は、三日も陽に当たると黄色くなってしまふ。洋書は一〇〇年ぐらいでぼろぼろになってしまふ。それに対し、楮一〇〇%の和紙は千年以上持つといわれている。

自然環境の問題が重視されるとともに、本物を求めようという志向の強い今日、一般に和紙は見直されつつある。地域に住む人たちがこの取り組みを通して、和紙づくりを地域の大切な伝統文化と捉え、その伝統文化を継承していく必要性を感じて取り組んでいくことをめざしたい。

なお、一九九八年の和紙講座では、小学校でも取り組んでいるケナフの栽培に合わせて、元東京大学農学部教授で、現在非木材紙普及協会会長の門屋卓氏を講師に迎え「和紙と地球環境——ケナフとは」という講演会をひらいた。和紙づくりの取り組みが、今日的課題である地球環境保護につながるという和紙の新しい視点は、この取り組みの意義を高め、いっそう活動が広がる可能性をもたらすことになった。

取り組みの広がり

和紙講座と小学校での取り組みが核となった「和紙の里づくり事業」であったが、これらの取り

組みはさまざまな形で広がりを見せている。

一九九八年の正月に向け、下久堅郵便局では公民館の紙屋で作った和紙はがきと記念切手とを組んだ手漉き和紙セットの販売を始めた。数年かかると考えていた和紙づくりの条件整備が、最初の年に整ったため可能となったことである。ただ白い紙を漉くだけでなく、そこに付加価値がつくことは活動の広がり結びつく。それだけでなく、活動資金の調達に結びついたことも大きかった。実際、和紙づくりを復活させたものの、使用している用具はほとんど四〇年前までと変わらないもので、いつ壊れるともされないものばかりだった。

現在では、全国でも紙漉き道具を作る職人は高知などに数人だけとなり、和紙を漉く「賃桁」を新調すれば一組四〇万円ほど、それも納品までに一年程度かかる。これを公民館の予算の中で購入することは困難であり、自分たちで活動資金を工面しようということから、このはがきセットづくりを始めた。

また、楮一〇〇%の障子紙も作成し一九九八年の文化祭で販売したが、市販の「和紙もどき」の障子紙の数倍の値段となっても、販売前から問い合わせがあり、午前中のうちに用意した一五セットは完売してしまった。

一九九九年の一月に行った兵庫県加美町の杉原和紙の取り組みをテーマとしたひさかた村塾では、自治会とも連携して地域づくりの側面で有意義な学習会になるとともに、公民館事業から広がる可能性もでてきた。

婦人会の研修旅行の先が和紙の先進地であったり、文化委員が個人で和紙についての研修のために旅をするなど、和紙をキーワードにさまざまな取り組みに広がっていった。

またJICA（国際協力機構）が主催し、アジア、アフリカ、中南米などいわゆる「第三世界」の政府関係者による「参加型地域開発の手法を学ぶ」という二カ月間に及ぶ研修会の現場研修の事例として一九九八年から一九九九年にかけて三〇名を超える研修生の受け入れも行っている。

インターネットでも「ひさかた和紙の里」のホームページを作っているが、和紙に興味を持ち、職業として紙を漉きたいという希望を持った若者が、京都から訪ねてくるなど、地域を越えて和紙をキーワードにいくつもの地域や人とのネットワークも生まれつつある。

地域への愛着

この取り組みを進めるなかで宮内公民館長は、この一連の取り組みが、「和紙づくりの伝統を通して若い世代に伝承し、紙漉きを通して子どもからお年寄りまで全員が心を通わせ、産業としてではなく文化として定着することで地域の色となり、下久堅への愛着を生んでいる」とまとめている。近年どの地方でも、均質的に社会基盤が整備されるとともに都市化が進み、快適な生活環境を得る代わりに、昔ながらの地域の色が消え、画一化した地域になりつつある。ハード面での住みよさも必要であるが、昔ながらの地域の特徴を大事にすることで、住んでいるところへの愛着づくりに結びつけることも大切ではないだろうか。

この取り組みを始めるにあたり文化委員会で「下久堅には何があるか」を考えてみた。出てくるのはマイナスイメージだけであり、胸を張っていえるような名所も事柄も思い浮かばなかった。そこに「和紙」が見え、「和紙」を何とか残し興そうという機運の高まりが文化委員会の諸々の活動を通して備わったといえる。

実際この取り組みが広がるにつれ、新聞やテレビなどで何度もこの取り組みが伝えられ、このことが地域の人たちの和紙に向けた関心を深め、一連の取り組みに対する参加者の広がりにつながる。とともに、「下久堅は和紙の里」という地域の文化としての評価が定着し、地域住民の誇りや愛着に結びついていった。「最近しばしば地区の外で『下久堅は和紙が盛んだったのですね』といわれるようになってきた」と、地区民は喜んでいいる。忘れられようとしていた「全村紙漉き成村」という伝統が、今回の取り組みを通して、産業としてではなく文化として復活し定着することで、誰もが胸を張っていえる地域自慢に育ちつつある。

和紙の里として

和紙の里と呼ばれるところは、全国に数多く存在している。古来からの産業をそのまま引き継ぎ現在でも和紙の産地として生きぬいている和紙の里、観光地化した和紙の里。数多い和紙の里の中でひさかた和紙の里の特色は何か。他の和紙の里との違いは、地域の特色として位置づける以上に難しいところであるが、前述の通りの「一枚の紙の価値がわかるこだわりの和紙の里」だといえる。

和紙の継承は、文化委員会の将来にわたってのテーマであるが、地域全体が和紙の里として復活するためには、そういう活動を支える自主的な活動やそれを進めるグループの存在も必要である。幸い下久堅には、農を中心とした多くの活発な活動を進めるグループが存在する。そういう活動を見る限り、この活動の今後の広がりは大いに期待することができる。

「みんなで語り、みんなで学び、みんなで創ろう下久堅」。この下久堅公民館の活動方針のように、和紙づくりの取り組みも、下久堅の顔となるように、多くの地域住民の知恵を出し合い取り組んでいくことが、地域づくりにも結びついていくだろう。

公民館の文化委員会の一連の取り組みは、和紙づくりの継承に向けたきっかけを作った。お年寄りから子どもまでみんなが地域に根ざした文化の継承に取り組み始めて今年で四年目、確実に活動は広がりつつある。

(三) 地域課題と公民館の可能性

「一点突破全面展開」。かつて学生運動などで使われたこの言葉が、下久堅公民館の事例を一言であらわしてくれる。まずこの取り組みは、かつて伝統産業であった和紙の復興という、地域固有の文化に関わる「地域課題」への取り組みである。そしてこれは地域住民によって組織された「住民主体」の取り組みでもある。実際、文化委員を中心とした多くの住民の主体的な関わりがなければ、活動の内容や参加者の層にこれだけの多様性や広がりを生むことはできなかつたであろう。また下

久堅小学校が授業の一環として全面的に関わった意味では「学社連携」の取り組みであり、紙漉き技術を伝承するお年寄りが子どもたちにそれを伝える「世代間交流」の場でもあった。一般の洋紙は丸ごと伐採した木を原料とするが、和紙は楮などの枝を原料とした再生可能な原料から作られるものであり、また一枚の紙を作る過程で紙の価値を知ることとは、「環境問題」や「生態系」を考える機会にもなった。

多様化した住民の要望に応えるために、公民館の事業を広げ、事業の量で公民館を評価する傾向がある。しかし、地域の文化や風土を大切にして、一つの事業に力を入れるなかで、多くの課題に重層的に取り組むことができた、この下久堅公民館の取り組みは、これからの公民館活動のモデルを示してくれたと感じている。

「地域連帯、自他共存の住民感情を育成し、地方自治の実をあげる場」(全国公民館連合会「公民館のあるべき姿と今日的指標」一九六七年、より)が公民館であるといわれてきた。

公民館が行政サービスの一機構として、作られたメニューを住民に一方的に提供し、逆に地域住民はそういうメニューを一方的に消費するという関係からは、公民館が本来の目的を達成する道はひらけない。

下久堅公民館の事例のような、住民主体の取り組みがあつて、公民館がこれからも存在する意義をもつのである。

飯田市の公民館は、こういう地縁に基づき、地域を基盤とした公民館活動とともに、志縁や知縁という地域を越えたネットワーク型の活動との関わりを模索し、そのことがいわゆる市民活動とかなPOとの協同の取り組みにまでつながりつつある。

しかし、こういう志を一にした活動に関わる人たちも、最後は終の棲家である地域の中でどう生きていくかが問われるのではないかと考えている。

その意味では、飯田市の公民館の四つの運営原則の一つ「地域中心の原則」を大事にした下久堅公民館のような事例が、これからも公民館の活動を進める基本であり、これからの公民館の可能性を生み出すものであると考えている。

(木下巨一、櫻井毅)

〈参考文献〉

飯田市公民館『飯田市公民館活動史』一九九四年

飯田市公民館『分館活動の手引き』一九九六年

長野県公民館運営協議会『公民館の基礎知識 平成十年版』一九九八年

長野県公民館運営協議会『社会教育実践集 信州の自然に生きそして学ば』第16集 一九九七年